

## [生徒指導]

# 互いにケアし合う道具としての交換日記を通した児童生徒理解における教師のかかわりに関する事例研究

－ミルトン・メイヤロフの「ケア」の概念および諸要素を手がかりにした分析と考察－

寺島 恭平\*

### 1 主題設定の理由と研究の目的

令和3年、生徒指導にかかわる基本書である生徒指導提要の改訂に向けた動きが始まった。改訂の背景には、平成22年に生徒指導提要がつくられて以来、いじめ防止対策推進法等の関係法規の成立など学校・生徒指導を取り巻く環境が大きく変化するとともに、生徒指導上の課題がより一層深刻化しているという状況があった。その中で、生徒指導の概念・取組の方向性等を再整理し、教育委員会及び学校における生徒指導の充実に資するという目的のもと改訂が進められていった。そして令和4年、生徒指導提要が12年振りに改訂された。

改訂された現行生徒指導提要と改訂前のものとを比較すると、生徒指導の定義（とらえ）自体が変わっていること、改訂前にはなかった文言が時代や社会の変遷に伴って使われていること、提要全体の構成が改編されていることなどが挙げられる。しかしながら、変わっていないものの1つとして、「児童生徒理解」の視点があげられる。改訂前では、「生徒指導を進めていく上で、その基盤となるのは児童生徒一人一人についての児童生徒理解の深化を図ること」、現行では「生徒指導の基本といえるのは、教職員の児童生徒理解です」と、それぞれ児童生徒理解の重要性について示されている。このことから、いかに社会が変化しようとも、生徒指導に関する課題が複雑化しようとも、基盤となる児童生徒理解なくしては、真に生徒指導を進めることはできないということを示していると言えよう。しかしながら、生徒指導提要には、児童生徒理解を進める上での方法原理については述べられているものの、そこにかかわる教師がどのような視点を持ち、どのような構えで児童生徒理解を進めていけばよいのかという点については、十分な説明がなされているとは言い難い。

このように生徒指導提要をとらえるとき、M・メイヤロフ（以下、メイヤロフ）の「ケア」の概念およびその主要素に着眼したい。それは、後段にも述べるが、メイヤロフの「ケア」の概念と生徒指導提要の内容には親和性が認められると考えるからである。また、メイヤロフの「ケア」の概念は、教師が児童生徒理解をする上でどのような方法を取るのかを決定する際の、根底となる考え方を示してくれるからである。

以上のことから本実践研究の目的を、メイヤロフの「ケア」の概念およびそれに立脚した諸要素を視座にした、実践の分析・考察を通して、児童生徒理解を進める教師の構えや子どもをどう見るかという視点の在り方について実践的示唆を得ることとする。

### 2 研究の方法

#### (1) 実践の概要

- ① 研究対象：新潟県公立小学校 令和X年度第4学年児童1名（康太さん；仮名）、筆者
- ② 実践期間：令和X年11月～令和X+1年3月
- ③ 実践方法：対象児童と筆者が交互に交換日記のように、①相手の質問に対する答え、②今日の出来事、③相手への質問、の3つについて毎日1ページずつノートに書く。筆者は対象児童の記述に対し、率直な思いをメッセージに込めて返す。
- ④ 実践に至った経緯と対象児童選定の理由

康太さんは、筆者が国語の少人数学習で担当していた当時4年生の男児である。康太さんは当初、授業場面において指示が伝わりにくく、学習に対する意欲もあまり感じられなかった。ノートを開く、ノートに書く、教科書を読む、考えを述べるなど、学習の基本となるようなことは、教師の声掛けが必要だった。加えて、仲間と一緒に授業に関係ない

\*上越市立直江津小学校

話をし始めたり、学習用具で音を鳴らしたり、授業を妨げるような行為も見られた。コミュニケーションをとろうとしても、会話が續かないということも多かった。授業以外の場面でも、規範意識が高いとは言えない児童で、仲間との望ましいかわり方ができていないことが多く見られた。

このような状況の中で、筆者にできることは、康太さんを含めた担当している子どもたちのことをよく理解することであった。しかし、康太さんについての理解がなかなか進まない期間が続いた。そこで筆者は、交換日記という道具を用いて、彼を理解しようと試みることにした。康太さんに、「あなたのことをよく知りたいから交換日記をしてみようと思うんだけど、どうかな」と持ち掛けた。筆者の呼びかけに康太さんは素直に応じ、11月12日に交換日記をスタートさせた。筆者と康太さんの間のやりとりを見て、「交換日記をやってみよう」と2名の男児が筆者に申し出たため、彼らとも交換日記を始めることとした。康太さんを含めた3名の中で、一番熱心に交換日記に取り組んだのが康太さんであったことや、交換日記に取り組んだ前後で大きく変容したことから、本研究の対象児として選定することとした。

## (2) 分析枠組みの検討

### ① 『生徒指導提要』とメイヤロフの「ケア」概念との親和性

ここで、メイヤロフの「ケア」の概念について考えてみたい。メイヤロフは、自身の著書（メイヤロフ、1987）において、ケアについて次のように述べている。

相手を支配したり所有しようと試みるのではなく、私は、それが本来持っている存在の権利において成長すること、またよく言われるように、“それらしくなる”ことを望んでいるのである。(メイヤロフ、1987, p.19)

これを、以下の生徒指導提要にある生徒指導の定義と比較してみよう。

生徒指導とは、児童生徒が、社会の中で自分らしく生きることができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動のことである。なお、生徒指導上の課題に対応するために、必要に応じて指導や援助を行う。(文部科学省、2022, p.12)

私たちは子どもたちの自分らしい成長や発達を希望としてもちながら生徒指導に当たっているのではないだろうか。メイヤロフが述べるように“それらしくなる”ことをまさに望んでいるのである。

また、メイヤロフは「ケア」の主な8要素をあげているが、その第1番目にあげられている「知識」という要素について、次のように述べている。

誰かをケアするためには、私は多くのことを知る必要がある。たとえば、その人がどんな人なのか、その人の力や限界はどれくらいなのか、その人の求めていることは何か、その人の成長のたすけになることはいったい何か—などを私は知らねばならない。そして、その人の要求にどのようにこたえるか、私自身の力と限界がどのくらいなのかを私は知らねばならない。(メイヤロフ、1987, pp.34-35) ※傍点は原文のまま

これは、先に述べたような、児童生徒理解の定義と重なる。「ケア」がかかわる対象の成長を望む行為であるとするならば、そのためにはまず、多くのことを知る、つまり理解することが必要なのだろう。

これらのことから、私たちが生徒指導提要に基づいて行っている生徒指導はメイヤロフの述べている「ケア」の概念や方法論と親和的に結び付いていることが分かる。

### ② メイヤロフの「ケア」の主な要素とそれらの関係性のとらえ

メイヤロフは、「ケア」の主な要素として、知識、リズムを変えること、忍耐、正直、信頼、謙遜、希望、勇気の8つをあげている。それらの関係性を、西田(2015)がメイヤロフ(1987)を引きながら以下のようにまとめている。

「誰かをケアするためには、私は多くのことを知る必要がある」(メイヤロフ、1987, p.34)【知識】し、「あるがままの相手を見つめなければならない」(同上, p.46)【正直】。また「私が期待しているものが達成されたかどうかを確認」し「もしそれが成功していなかったならば、他の方法で再び試みる」(同上, pp.39-40)【リズムを変えること】も必要である。さらに、「その相手が、自ら適したときに、適した方法で成長していくのを信頼する」(同上, p.50)のと同時に「ケアにたずさわる自分自身の能力も信頼しなければならない」(同上, p.53)【信頼】。それは、「私のケアをとおして相手が成長していくという希望」(同上, p.60)【希望】と「相手が一体どのようなものになるのか、また私自身がどのようなものになるのか、十分予測できない」ような「未知の世界に踏み込む場合にも存在する」(同上, p.64)【勇気】に支えられている。「ケアする人は実に謙虚であり、相手や自分自身について、またケアというところまでが含まれるかについて、すすんでより多くのことを学ぼうとする」(同上, pp.55-56)【謙遜】。そして「全面的に身をゆだねる相手への関与の一つのあり方」(同上, p.44)としての【忍耐】も持ち合わせている。

※【 】はそれぞれ、メイヤロフの「ケア」の主な8要素を示すために筆者が付した。

これらは、「ケア」に当たる者の在り方を示していると考える。本実践に置き換えてみると、対象となる子どもをどのように（どのような存在として）見るか、どのような構えで接するか、どのようになりたいかというような問いに対する、1つの指針となるようなものである。臨床では、これらが絡み合いながら、それぞれの要素を行き来しながら、児童生徒理解が進んでいくと言えよう。

### (3) 実践の分析・解釈の方法

以上の実践の概要および分析枠組みの検討を踏まえて、生徒指導と親和性の高いメイヤロフの「ケア」の主要要素を視座にしなが、対象児童と筆者の交換日記のやりとり（文字を媒介とした対話）を分析的に解釈する。分析の際には、メイヤロフの「ケア」の諸要素（知識、リズムを変えること、忍耐、正直、信頼、謙遜、希望、勇気）が交換日記のやりとりの中で、どのように働いていたのかを明らかにする。

## 3 研究の実際

ここでは、約3か月間の交換日記の記述を、康太さんと筆者の関係性の深まりの度合いによって3つの時期に分けて分析する。3つの時期について、1つ目は、「勇気をもって互いを知ろうとする」時期とした。交換日記を始めて1週間前後の時期とする。2つ目は、「ケアし、ケアされるという関係性へ」という時期とした。交換日記を始めて2～3週間の時期とする。康太さん自身が自らの変容に気付いたことで自信をもち、さらに変わっていきこうという意思が見られたという時期である。3つ目は、「互いの自己実現の達成」という時期とした。交換日記を通して、互いが「なりたいたい自分」へと変化していくことを実感できた時期であり、互いに互いを必要としていた時期でもある。これらの3つの時期の中で、特徴的な記述があったものを事例として示し、メイヤロフの「ケア」の概念や諸要素を視座に分析する。

### (1) 勇気をもって互いを知ろうとする

2日目 11/15(月)

#### 筆者の質問

（前日の日記に）直したいところがあると書いていましたが、どのくらいの気持ちで直したいと思っていますか？100%中だったら、何%ぐらいですか？教えてください。【知識】

#### 康太さんの答え

90パーセント

すっすごい！90%だったら、絶対に直せるし、あなたは変われます。あとは変わろう、直そうという勇気だけです。みんなに流されないで正しいことをしようと思うことが大事だね。【希望】【正直】

#### 康太さんの答え

正しい行動をとって、今日は算数をしたと自分でも思います。これからもいろいろなべんきょうで正しい行動をとりたいと自分でも思います。

正しい行動がとれたことだけでもすばらしいのに、それを自分でもしっかりと分かっているところ、さらにすばらしいです。康太さんは本当にしっかりとした考えをもっているのだということを、私は確信しています。それを知ることができ、私はとてもうれしいし幸せです。ありがとう!! 【正直】

4日目 11/22(月)

#### 今日の出来事

今日の国語の時間は康太さんはしっかりと集中してすばらしいなと思っていました。安心して任せられるなという思いが強くなってきています。この調子で、国語だけではなく、どの学習でも康太さんのよい姿が見たいなと思います。【忍耐】

#### 筆者の質問

これまでの交かん日記で、康太さんはとても正しい考えをもっていることがよくわかってきました。その正しい考えを正しい行動にうつすことはできそうですか？康太さんが正しい行動をとることで、周りの人たちが少しずつだけれど、よい方向にかわっていくと思います。どうでしょうか？【信頼】【勇気】【希望】

8日目 11/26(金)

#### 筆者の質問

給食の時間の行動は、周りの人をだれも幸せにしないと思います。康太さんなら正しい行動ができると信じて私はいつも見守っています。悠斗さん(仮名)に注意してあげることはできそうですか？【信頼】【勇気】【希望】

#### 康太さんの答え

周りの人をしあわせにするようにとりくんでみます。

そうだね。自分も幸せ、周りも幸せ、そんな学級になるといいね。私は康太さんの書いてくれることを読むと、とても幸せな気持ちになります。いつもありがとう!! 【信頼】

※実線囲みは筆者が書いた日記のページ、点線囲みは康太さんが書いた日記のページの内容をそれぞれ示す。  
※網掛けは、康太さんの日記の記述に筆者が引いたマーカーを示す。斜体は康太さんの記述に対する筆者のコメントを示す。  
※日記の記述内の【 】には、働いていたと解釈できるメイヤロフの「ケア」の諸要素を付記。（以下、同様）

メイヤロフの「ケア」の主要要素の視点で、交換日記を始めて1週間前後の記述を見てみると、筆者は康太さんのことを知ろうとすること（【知識】）に加え、筆者が康太さんに「こうなってほしい」という願い（【希望】）をもって質問をしていることが読み取れる。さらに、康太さんのことを知ることを通して、彼の可能性に対する【信頼】と、これからどんな変容をしていくのだろうかという不確定な状況へ踏み込もうとする【勇気】も含まれている。また、康太さんが

素直に答えてくれたことに対しての筆者のコメントは、ありのままの康太さんを受け入れようとする【正直】な態度や構えが基本になっていると言える。このようなありのままを受け入れようとする筆者の構えは、康太さんの成長に対する【信頼】と康太さんに全面的に身を委ねようとする【忍耐】も併せもっていると解釈できる。

一方、ここには記述してはいないが、康太さんも筆者への質問を書いている。筆者に対して質問し、答えを知ることによって、筆者のことを知ることにつながった（【知識】）のである。つまり、メイヤロフの「ケア」の諸要素を通して見たときに、康太さんもまた、筆者をケアしようとしていたのではないかとと言える。康太さんの質問の内容は、誕生日や家族構成、漢字の学習は好きかどうか、好きなスポーツや食べ物など、筆者のパーソナルな部分についてのもが多かった。筆者も康太さんの質問にはしっかりと答えることを続けた。「あるがままの相手を見つめる」ことと同じように、【正直】に「あるがままの自分を見せる」よう、自己開示することを意識して康太さんの質問に答えようとしていた。

## (2) ケアし、ケアされるというケアし合う関係性へ

12日目 12/2(木)

### 筆者の質問

私と交かん日記を続けてきて、康太さんが自分で、ここが変わったなと思うところはどんなところですか？【知識】【リズムを変えること】【勇気】

### 康太さんの答え

変わったところは、みんなのいいところや寺島先生のいろいろなところを知れたことです。

私もそう思います。康太さんのことを知れたこと、私の一生の室です。そして、あなたは確実に変わってきているということ、この事実が何よりの幸せです。【信頼】【正直】

16日目 12/9(木)

### 筆者の質問

昨日も書いたのですが、最近康太さんがとっても落ち着いているように感じています。康太さんは自分ではどう思いますか？【知識】【リズムを変えること】【勇気】

### 康太さんの答え

自分でもしずかだと思っています。また、全部のべんきょうをしずかにやっていると思います。

その調子でがんばってくださいね。本当に変わってきていますよ。自信をもってください。しずかにしているだけでなく、一生けん命考えることが大事ですよ。【希望】【信頼】【正直】

17日目 12/10(金)

※筆者が家庭の都合で1日休んだが、康太さんは日記を書いていた。

### 今日のこと

今日は、寺島先生がいなくて、自分がしんばいでべんきょうをしていました。算数の時間に黒板に自分のいけんを書きました。少しはずかしかつたけど、せいかいだよと言われてうれしかったです。

どんどんせっきよく的になってきていることがわかります。日記の中身もとても読みやすく、気持ちも書かれていて大変すばらしいです。【正直】

(中略) 寺島先生のいないきゅうしょくは楽しくなくて、ずっとしずかにしていました。だけど悠斗さんがせきから立っていたので注意してあげました。ふつうにせきにすわってくれてうれしかったです。これからも注意していきたいと思います。

悠斗さんも康太さんから言われたら、「しっかりしよう」と思うのではないのでしょうか。これからもぜひ続けてください。【希望】

20日目 12/16(木)

### 今日のこと

今日のきゅうしょくの時に、自分で行動して、じゅんぴをしりだれともしゃべらずにじゅんぴができてよかったと自分でも思いました。

成長していますね。あなたが準備をがんばると仲間がとっても助かります。つづけてください。【希望】

2週間から3週間の交換日記を見てみると、筆者の質問の質に変化がみられる。康太さんの変容や成長に気付いた筆者は、これまでの「康太さんが正しい行動をとることで、周りの人たちも少しずつだけれど、よい方向にかわっていくと思います。どうでしょうか?」「悠斗さんに注意してあげることにはできそうですか?」のような、行為や行動の変化を促すような質問から、「康太さんが自分で、ここが変わったなと思うところはどんなところですか?」「康太さんは自分ではどう思いますか?」というように、より自己の内面にアプローチしていくような質問へと【リズムを変えること】への意識が生まれてきていると解釈できる。さらに康太さんのことを知ろう（【知識】）とする意識をもちつつ、未知の世界に踏み込む【勇気】も含まれていると考えられる。このような筆者の構えにより、康太さんも自分自身の変容を自覚してきているような記述が増えてきている。さらにこのころは、康太さんが、自分自身に自信をもって行動し、その結果どうだったのかということ自分から記述していることが増えた。

それに対して筆者は、これまでと変わらず、康太さんのあるがままを受け入れようとする構え（【正直】）でいることが分かる。また、このころは「続けてください」というような、これからの成長をさらに期待したり【希望】をもったりすることが見て取れる記述が増えている。これらのことから、筆者のアプローチが康太さんの成長を促していること、康太さんの成長によって筆者の康太さんへの見方が変容していることが分かる。また、「先生がいなきゅうしょくはたのしくなくて」という記述から、互いの存在を必要としていることも読み取ることができ、康太さんと筆者の相互信頼の高まりや、関係性の深まりが確認できる。

### (3) 互いの自己実現の達成

29日目 1/19(水)

#### 筆者の質問

4年生ももうすぐ終わろうとしています。4月から今までをふりかえって、成長したと思うところはどこですか？くわしく知りたいです。【知識】【勇気】

#### 質問の答え

ふりかえってすごいと思うのは、べんきょうで前まではしずかにしてやっていなかったけど、こうかんにつきをやって、べんきょうがしずかにできたりしているから、自分もすごいと思いました。

成長したところを自分でしっかりとと言えるところが立派です。「こうかん日記をやったから」という理由は少しはあるかもしれませんが、成長の大きな理由は、「康太さんの本気」なのだと思います。そして、しっかり勉強できる力は、康太さんがもともともっていたものだと思います。本気を出したことによって、もっていたものがしっかりと発揮されたのです。【信頼】【正直】

#### 今日のこと

こうかん日記を57ページも2人でやってきてますね。ほくは、こうかん日記をつづけてやっていきたいと思います。楽しいからつづけていきたいです。よかったらまたつづけませんか？

57ページですか。すごいね。康太さんの今日の日記を見て涙が出ました。うれしくて。もっともっとつづけましょうね。

【希望】【勇気】

#### 康太さんの質問

こうかん日記をもっともっともっともっとつづけていきませんか？

30日目 1/20(木)

#### 質問の答え

こうかん日記、もっともっともっと続けたいと私も思います。前のページにも書きましたが、康太さんの日記を読んで、涙が出ました。こんなにうれしいことは久しぶりなように感じています。幸せな気持ちになりました。ありがとう!! 【忍耐】

#### 今日のこと

あと1ページでおわりますね。長かったですね。こうかん日記のおかげでほくの生活がかわりました。

これはすごいことです。ふつう、こんなことは書けませんよ。康太さんはすばらしい感性をもっています。大切にしてほしいです。ご両親や家族にはかんしゃしたいですね。【正直】

康太さんは、1冊のノートが終わるというタイミングで、「こうかんにつきをやってべんきょうがしずかにできたりしているから、自分もすごい」と記述している。そして、このような自分の成長を感じられた道具としての交換日記を「楽しいから続けたい」と願っている。さらに、筆者に対し「よかったらまたつづけませんか？」と提案をしている。それに対し筆者は、「涙がでました」とコメントを返している。これは、康太さんの成長を感じる嬉しさと、交換日記を続けたいという康太さんの思いから、筆者を必要としてくれているという気持ちを感じたことに対する嬉しさが含まれている。自分という存在の意味や価値を康太さんは筆者に与えてくれたのである。つまり、私たちは、互いを理解し合うための道具であった交換日記を、文字を媒介にした対話によって、互いの成長を互いが促し合う道具として、互いに問い直していったのである。これは、互いに変わり合えるという【希望】をもち続けることができた結果であると考える。

そして交換日記を始めて30日目、康太さんは「こうかん日記のおかげでほくの生活がかわりました」と思い綴った。成長したのではなく、生活がかわったのだ。多くの成長を互いに喜び合い、喜びを言葉に残してやりとりをしてきた結果、1つ1つの成長が康太さんの中でつながり、「生活がかわった」という言葉として表出されたのだと解釈する。

交換日記が、互いの自己実現を達成するための道具となり、ケアし合う場となっていたと考えられる。1つの道具が、互いに受け入れ合い、互いに互いを必要とし合う場へとその概念を拡張していったのである。

### (4) 実践を通じた康太さんおよび筆者の行動の変容

交換日記を続けたことで、康太さんと筆者がかかわる場面が非常に多くなった。担当する授業の中ではかかわりがあったが、交換日記開始前と比べ、授業以外の場面でも康太さんから筆者に話しかけてくれるという姿が多く見られるようになった。「先生と一緒に授業がしたい」「来年は先生が担任だといいな」などと話したり、「先生がいなかったときも、ちゃんとできてたよ」と、日記への記述に加えて口頭でも伝えてくれたりするということがあった。また、授業場面においても、交換日記に取り組む前に見られた康太さんの不適切な行動が少なくなっていった。ノートを開いて書くこと、仲間の発言を最後まで聞くことについては個別の声掛けが以前は必要だったが、全体への声掛けだけで適切な行動をとることができるようになった。さらに、授業中や給食中に見られていた不必要な離席もほとんどなくなり、離席しようとする仲間への声掛けもできるようになっていった。

このような康太さんの行動の変容から、筆者に対する康太さんの信頼を感じたことで、筆者もまた、より康太さんを信頼しようという思いを強くした。実際、交換日記を続ける中で、康太さんの日記に「静かにできた」という記述があっても、筆者はそのようにとらえることができなかつたという事例があった。つまり、康太さんの記述内容が筆者の見取りと必ずしも一致しないことがあったということである。しかし、康太さんのさらなる成長の可能性を信頼し続け

たことで、筆者が見取った姿と記述内容が異なっていたとしても、康太さんのありのままを受け入れることができたと考える。

#### 4 児童生徒理解を進める教師の構えや子どもを見る視点

ここでは、本実践研究の目的にもあるように、メイヤロフの「ケア」の概念および諸要素を視座にした康太さんと筆者のかかわりの分析によって明らかになった、児童生徒理解を進める教師の構えや子どもを見る視点の在り方について考察する。

筆者が康太さんと交換日記を通してかかわる中で特に意識したこととして、「相手を知ろうとする」（「ケア」の諸要素の【知識】）が挙げられる。相手を知るためには自己を開示する必要があった。自己を開示することで相手も心を開いてくれると考えていたからだ。では、筆者はどのような構えで康太さんを知ろうとしたのだろうか。

メイヤロフの「ケア」の概念には、次のようにある。

相手が成長し、自己実現することをたすけることとしてのケアは、ひとつの過程であり、展開を内にはらみつつ人に関与するあり方であり、それはちょうど、相互信頼と、深まり質的に変わっていく関係をとおして、時とともに友情が成熟していくのと同様に成長するものなのである。(中略) 他の人々をケアすることをとおして、他の人々に役立つことによって、その人は自身の生の真の意味を生きているのである。この世界の中で私たちが心を安んじていられるという意味において、この人は心を安んじて生きているのである。それは、支配したり、説明したり、評価したりしているからではなく、ケアし、かつケアされているからなのである。(メイヤロフ, 1987, pp.14-16) ※下線：筆者

メイヤロフの「ケア」の概念は、一方向、つまりケアする側とケアされる側や上から下へというような垂直方向のとらえではない。「ケアすることをとおして、他の人々の役に立つことによって、その人は自身の真の意味を生きている」「支配したり、説明したり、評価したりしているからではなく、ケアし、かつケアされている」という言葉に表れているように、ケアしていると思っている側でも、実はケアされているという関係性にある。どちらもケアをしているし、ケアされているという、双方向的なかかわりであり、両者が対等な水平方向のかかわりとらえているのである。「ケア」の諸要素にあるような「ケアする人は実に謙虚であり、相手や自分自身についてより多くのことを学ぼうとする」（【謙遜】）態度や構えを示していると言えよう。

研究の実際の中での筆者もまさにこのような構えで康太さんにかかわっていたと考えられる。交換日記の中で質問し合うことを通して、お互いのことを分かり合うことができた。康太さんの記述をありのままに共感的に受け止めることで、筆者の質問に対しても素直に自己を開示して答えてくれた。教師だから子どもだからという意識から離脱し、【謙遜】の姿勢で康太さんと対等な関係性をつくることを継続してきた結果、筆者との関係性が良好になり、授業中にも指示を聞いて活動したり、望ましくない行動も最小限の声掛けで止めたりすることができるようになったと考えられる。

#### 5 実践上の意義と課題

本実践研究における康太さんと筆者による交換日記という手法は、方法論として非常に見え易く分かり易いものではあるが、1対1の状況だからこそ可能だったもので、集団へのアプローチを考えた場面ではその汎用性は低いのではないかと考えられる。この点において本実践は極めて個別的で事例的なものであり、一般化からは遠い位置にあると考えられるため、課題であると考えられている。

一方で、児童生徒理解を進める教師の構えや子どもを見る視点の在り方のような見えにくい部分において、本研究ではメイヤロフの「ケア」の概念および諸要素が拠り所となることが明らかになったことは成果であると言える。生徒指導提要にある児童生徒理解の方法原理を解釈しようとするとき、メイヤロフの「ケア」の視点を意識することが、互いにケアし、ケアされるような関係性を築くための教師の在り方を問い直すことの一助になるのではないかと考える。

#### 引用文献

- ・ミルトン・メイヤロフ著 田村真・向野宣之訳(1987)『ケアの本質－生きることの意味』、ゆみる出版
- ・文部科学省 (2010) 『生徒指導提要』
- ・文部科学省 (2022) 『生徒指導提要』
- ・西田絵美 (2015) 「メイヤロフのケアリング論の構造と本質」『佛教大学大学院紀要教育学研究科篇』第43号, pp.35-